



### 学校教育目標

- ・進んで学ぶ生徒(知)
- ・心豊かな生徒(徳)
- ・たくましい生徒(体)

## 美原中の幸福についての考え方について

イチョウの黄色い葉が、青空にひらひらと舞う季節は、自然の美しさに息を止めて見てしまうほどです。さて、明日からは、期末テストです。どの学年にとっても大切なテストですが、特に3年生にとっては、志望校決定の大きな関係を持つと考えている人もいて、プレッシャーのかかる人もいます。それに負けず、是非、正々堂々と自分の力を出し切ってもらいたいと思います。

今日は、「幸福」についてお話をします。「幸せ」になりたいと考えている人は、多くいることでしょう。日常生活の中では、幸福という言葉あまり使うことは、ありませんが、私事で恐縮ですが、私は、仕事では、年を重ねるごとに益々責任の重さを感じて日々過ごしています。しかし、それとは逆に、昔に比べると「ふと自分は、幸せ!？」などと、責任の重い仕事の中でも妙に「幸せだな!と」感じるものが、多くなってきているなあと思うときがあります。「大変なのに幸せ」という不思議な感覚です。

では、人間の「幸福」を生み出すモチベーションは、何処から生まれてくるのでしょうか。アメリカの心理学者ハーズバーグ氏が提唱した「二要因理論」によると、最大の要因になるのは、「人に信頼されること」や「本人が実践すること(仕事など)自体に意義」感じるのだそうです。一方面白いのは、「給料」や「勤務条件」といった待遇面の要素を向上させて、昇給したとしても、確かに「不満足」感は消えましたが、意外なことに長期の満足につながらず「幸福感」が、高まったという結果が継続しないのだそうです。人の「満足」の対極は、「不満足」でなく、ただの「不満足の解消」で止まり、結局、本人が仕事そのものを楽しみや意義を感じている状態が「最高」だったということです。それを表した言葉で、有名な哲学者のモンテスキューが「幸福」について、このような言葉を残しています。

**「ただ幸福になりたいと望むだけなら簡単だ。しかし、他人よりも幸せになりたいというのであれば、それは、困難だ。われわれは、実際以上に他人を幸福だと思っているからだ」と述べています。**

同級生のあいつは、あんなに早く出世したのに自分は、まだ平社員だ。人と比べて自分は、学力や容姿、運動能力が劣っている。他には、今、社会に大きな影響をもたらす SNS では、投稿者のほとんどが自分の良い部分を投稿しています。中には、少し盛っていると感じていても、理想の夫婦像や家族像、高価なご馳走や素敵な旅・休暇の過ごし方、輝かしいキャリアを想像させる写真や説明などを見ると「他人は何て素晴らしい毎日を過ごしているんだ、それに比べて、自分・・・」は、何とも言えない敗北感やモヤモヤを感じさせられます。しかし、よく考えてみると、出どころのわからない SNS を除けば、その比較対象が、極めて身近な存在だということがわかります。同級生であったり、同期に就職した人間であったり、近所の方であったり、境遇や年齢が近い人で有ることに気がきます。きっと、その人がどんなにすごい活躍をしているのを知っていても大谷翔平選手と年俵を比較したりしないでしょうから。



では、なぜ自分に近い人にと比べて一喜一憂するのか、これは、自分の「価値基準」が確立していないのが原因です。これが確立していないと、その辺に転がっている出来合いの基準に当てはめ、誰かが話していた根拠不明の説とか SNS の「いいね！」の数、調査統計の平均値とか大学の偏差値とか就職ランキングとか。他人や業者が決めた決めた基準に乗っかることで、自分のポジションを決める人で終わってしまいます。たとえ誰かに今、勝ったとしても必ず上には、上がります。自分の「価値基準」がないと振り回され、他人の良い所ばかりを見て、自分の悪い所ばかり見てしまう習慣がつかます。それは、この悪循環がその後も続くことになり、一生苦しむことになってしまいます。この考えを重視される方の中には、「これからの世の中は、こうじゃないと生きていけない」と言う方もいますが、生きていけないと言っても戦国時代でもないので、失敗したり、上司に叱られても、「切腹」など、命のやり取りは、現在は、ありえません。贅沢は、できなくても日々食べていけるだけの経済力があることを良しとすれば、私は、自分の悪い所ばかりを見て、嫉妬地獄へ陥らないでほしい、苦しんで生きる一面の意味だけで捉えてほしくないと伝えたいのです。ある人がこうも言っています。

**「他人の幸福を羨んではいけない。なぜなら彼のひそかな悲しみを知らないからだ」**

**「ひそかな悲しみを知らない」**

とは、素晴らしい結果や偉業を成し遂げた人がどれくらいの苦悩と失敗の屈辱や犠牲を払ったのかを感じる感性を持たず、結果が出ると飛びつくように称賛を述べたり、根拠のわからない扱いをしたりすることです。学業で苦勞している人に対しても同じです。結果だけ見て、その人の努力や這い上がるまでの歴史を簡単に言いつぎるのには、すっきりしません。

では、「幸せとは、何でしょうか」「幸せ」と言う気持ちは、「嬉しい」「悲しい」などと同じく人間の感情の一つです。例えば、最近の生活では、お金の不足すると大きな苦勞を抱えづらるので、お金持ちは、最近の幸福感の中では、かなり重要な位置を占めているようです。私は、この考えについては、否定する立場には、ありません。しかし、人は、生活や仕事をする中で、次第に自分の本質を知り、自分の「価値基準」やスタイルを練り上げていきます。それが自然とその人の「好き・嫌い」や「幸せの基準」にもなります。**「幸福になるには、好きなものを持っている状態」**、これこそが幸せだということです。

私は、これまでの42年間多くの人と出会いました。望む出会いも望まない出会いもありましたが、この中で私がわかってきたことは、生き方・働き方は、課題に真摯に向き合うことでしか生まれない「価値基準」があるということです。他の人の基準で仕事をするとうまく失敗を他人のせいにして自分の感覚や感性が鈍ってしまい「幸せ」を感じづらくなってしまいます。私も60歳代も半ばに差し掛かり、健康や体力などいろいろなものが衰え消えていく中で「感性」だけは、益々研ぎ澄まされる、そんな感覚が今の自分にあるのです。そんな時、この言葉が胸に刺さりました。

喜劇王のチャップリンがこのような言葉を残しています。**「人生は、クローズアップで見れば悲劇だが、ロングショットで見れば喜劇だ」と**いう名言です。映画人らしい名言です。

皆さんの人生は、これから様々なことが起きます。しかし、それに向かうことで多くの経験を重ね、時間を経て、「幸せ」だったと感じる「価値基準」をもって、充実した人生を歩んでもらいたいと強く願っています。

